
ノンフィクションモンスター

人从蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノンフィクションモンスター

【Nコード】

N1961L

【作者名】

人从蛙

【あらすじ】

「俺は現実に生きる。故にフィクションなどいらない」

残念。そこに物語がある以上、その運命にはあがらない。舞台はバラバラ死体まみれの学校だ。「現実」が勝つのか、はたまた「モンスター（架空）」が勝つのか：前代未聞の対決が始まる！

現実にはフィクションを照らし合わせてはいけない。そんな事したら世界は崩壊する。故に、神だの幽霊だの：（省略）は信じない。崩壊するから。一つでもそんな物はあってはいけない。

そう思った矢先の出来事だった。

俺はその日、たまたま寝坊した。本来登校していなくてはいけない時間はとくに過ぎていた。ので開き直ってゆっくり制服に着替え、ゆっくり朝飯を食べる。朝飯を食べてると、玄関のドアが開く音がある。しばらくすると、リビングにくたくたになった姉ちゃんが登場。覚束ない足でソファに倒れ込む。

「しんどい」

「なんなん、姉ちゃんオールしとったんけ？」

「うん、頭痛いわ」

「酒飲み過ぎや」

「しゃーないやん。久々の部活の飲み会やったんやもん。うう気持ち悪う」

酒臭い姉に水を渡す。

「あんた、学校どないしたん？」

「寝坊したからゆっくりしてんねん」

「そうなんや。やったら学校休んで、一日介護してや。私、今めっちゃしんどいねん」

「あほ。自業自得や。授業受けんの嫌やけど、放課後に友達と遊ぶ約束してるから介護は無理」

「なんやねん。お前学校に何しに行つとんねん。高い学費払ってんに親不幸もんが…」

「朝帰りのお前に言われたないわ。昨日、オトンめっちゃ怒ってたで」

「え…まじ？ちゃんと連絡したやん」

そう言ってきたんで、間違って俺に送信したメールを見せる。

「ちょ…なんであんた言うといってくれんのよ！最悪やわ！」

「ほな俺学校行ってくるわ」

「ちょい待ちい！」

無視。どうせあの体調じゃ追ってもこれまい。

自転車乗って、駅まで向かう。東京引越してきて半年か。相変わらず慣れないな。この土地は。やっとこさ標準語には適応してきたが、たまに異様に腹が立つ。

駅に着き、駐輪場に自転車を置く。改札に向かい、電車に乗る。この時間でも人が多い。大学生のカップルが俺の前でイチヤつく。うざいな。気を紛らわすために、携帯をいじる。mixi起動。誰かなんか書いているかチェック。すると、タツツーこと俺の親友、佐々木達也が一言欄にこんな事を書いている。

『体育館にモンスターがいる！皆、学校から逃げろ！』

思わず、吹く。返事を書く。

『もっとマシな冗談書け（笑）』

駅から歩き、学校到着。今この時間だと4時間目。古文。

「…だるいなー。山本かー。ガミガミうるさそうやし…サボったろふとさっきの『体育館にモンスター』が気になる。」

「…暇やし行ってみよ」

体育館到着。…っておい。おいおいおい。

「なんやねん、コレ」

体育館はバラバラ死体だらけ。皆死んでる。体育教師の北川、その他生徒…バラバラ。首、腕、脚、内臓…散らばっている。首以外はもはや誰が誰の物だか判断出来ない。

達也は？

達也発見。男子更衣室にて。バラバラ。頭、腕、脚、内臓…手にはm i x i 起動したままの携帯。

「もしかして、例のモンスターか…そいつに達也も…体育館におっ

た奴らもやられたのか？」

…アホバカクソ野郎。

そんな物いる訳ないだろう。これは夢じゃない。現実。頬抓るとちやんと痛い。身体が伸びる人間もないし、空島なんかもある訳ない。そーゆーのは漫画、映画、小説…すべてフィクション。よし。一応、警察に電話。んで、他の現状確認するため体育館を出る。

学校の中も酷い。体育館とほぼ同じ。一年教室…ほぼ全滅。同じく二年も。音楽室も家庭科室も理科室も職員室も。そして我が三年二組も…

「あー、やっぱりか」

古文の山本先生、親友の倉本、竹下、大野、玉山、山口、クラスのマドンナ松川絵美…全員バラバラ。これは酷い。てかい加減にしろ。さっきからゲロ吐くの我慢してんだぞ。

なんとなく、松川の頭に近づく。可愛い顔が台なし。鼻は折れ曲がってるし、白目剥いて、舌がべろーんと出てる。

「福笑いかっ」

バラバラ死体に突っ込む時点で、俺も大分キテるな。もう俺までフィクションみたいだ。馬鹿馬鹿しい。

よくよく考えると、ここは崩壊した世界なのかもしれない。フィクション。誰かに作り出されたフィクション。そうだ、これを作った制作者を見つけないと。通称モンスター。モンスターなんて現実にはいないから、もちろん制作者もフィクション。

「やったら終わらせたろ。うっといし。皆の敵討ちや。」

現実の恐ろしさ教えたるわ」

俺は限なく学校を探索する。モンスター。奴を探すために。外から複数のパトカーの音がする。警察も来た。さて、どうするモンスター？

三年七組を通る。流し目で見てた三年の教室もそこで止まる。中には生きた人間がいる。俺は迷いなく教室に入る。

「あ」

モンスターの正体は、日本刀を持った女子だ。うちの学校の制服。しかも、コイツ知ってる。

「愛美やん。なにしとんねん」

「あ、関西じゃん。オッハー」

古いポーズをして挨拶。日野愛美。部活の同期。彼女が言ってる関西とは俺の事。

「これ、全部お前やったん？」

「うん、そうやあでー」

下手くそな関西弁で返答される。腹が立つ。愛美は皆の返り血浴びて達也がmixiで書いていた通り、

モンスターみたいになっていた。

「どうしようかな？私、関西の事めっちゃ嫌いやから、どこから切り落としちゃおうかな？」

「…そんな好きしたらええやん。あ、ちよい待ち。その前に言いたい事あんねん」

俺は腹に力を入れ、叫ぶ。

「このクソフィクション野郎！」

愛美は急に俺が叫んだので、びくつく。

「な、なによそれ。私はちゃんと実在してるわよ！」

「こんな無茶苦茶な事しといてなにが実在じゃボケ！しかもお前一人で出来てる時点でおかしいやろがい！」

「出来たんだから仕方ないじゃない。それにね、私をこんなのにしたのも、皆を殺したのも全部関西：あんたのせいなんだからね！」

「はあ！？他人のせいにすんなよアホが！なんで俺のせいやねん！言うてみる！」

「あんたが：あんたが自分の価値観押し付けたせいだよ！バカ関西！」

「はあ？価値観？」

「あんたが現実現実言うすぎるから頭に來たんだよ！『俺、フィクション嫌いやねえん。だから映画とか漫画も嫌いやねえん。あないなもん現実に生きられへん奴の逃げ道やわあ』って言っただろうが！何回も何回も私に！」

「知るかボケ！あとさっきからなんやねん、その下手くそな関西弁わ！関西人に謝れ！あと殺した皆もついでにや！」

怒鳴り合いが続く：と思いきや、愛美は黙り込み、まるで今から俺に愛の告白をすように呟く。

「：私はね：信じてるんだよ。神様とか幽霊とか：本当にそれは存在してると思ってる。いずれは私は：天の使者に選ばれ世界を粛正

する」

ある意味、その発言はバラバラ死体を見るより衝撃だった。俺は、俺はてっきり愛美は俺の価値観と似てると思ってた。というより、愛美自身にそんな考えがあった事に驚いた。

「なんやねんそれ。頭おかしいんか。なんか台なしやわ。お前そないな奴やったんか。もっと前から言うときや。そしたらお前なんかと関わらずにすんだのに」

「言いたかったよ！でも…恐かったんだよ！そういう、今のあなたの態度が！私の価値観が否定されるのが！それにあなただけじゃない！皆にも、絶対否定される。だから恐かった！だから一人残さず殺したんだよ！京子も美穂も…好きだった達也君も全員！自分の価値観を守るために、好きな人も関係ない人も殺した！」
そう言った後、愛美は刀を構え俺に狙いを定める。

「どう？これからあなたは…否定し続けた物に殺されるんだよ？さっきあんたが言った通り、こんな現状は現実にはほぼ有り得ない。でも、すでに起こってしまったているの。」

私はフィクションをノンフィクションに出来る…正義の使者なのよ…」

「……ぶっ。ふふふ、ははははは！」

俺は…不思議と可笑しくなり、その場で爆笑する。

「はははは！あ、アホや！アホすぎる！はははは！どんなけ自分好きやねん！どんなけ頑固やねん！そない自分の価値観大事やったら、こんなんするよりもっと他の事出来るやろが…ぶははははは！」

「わ、笑うな！私を、私の価値観を笑うな！」

俺の爆笑を予想してなかったのか、愛美は一旦刀を下に向け俺に口で反撃してくる。

「あんた、散々自分の価値観押し付けたくせになによそれ！」

「た、確かに押し付けたんわ認めるわ。ふふふ。でも、価値観なん

て人それぞれ違うから楽しいもんなんやで。俺の現実主義価値観も達也やら玉山には否定されてたし、でもお前みたいに殺そうとかは思わなかったわ。それが普通やし。そんなん誰でも解るやろが…ははは！」

「…またそうやって私の価値観を潰そうとする」

愛美の表情が鬼のように変わっていく。それでも俺は怯まず攻撃。

「被害者ぶんなや！この我が儘女！そや、こんなんお前のただの我が儘や！価値観とか関係あるか！お前だけじゃ！価値観馬鹿されて人バラバラにする奴なんか！周りを巻き込むなボケ！馬鹿されんの嫌やったら勝手に自殺しろ！」

「黙れえええー！！」

愛美は叫ぶと、刀を俺の腕に振り落とす。右腕がごっそりと落ち、血が噴射する。激痛。でも止めない。

「ほ、ほらみろ！口で反撃出来なかったらすぐ暴力や！ジャイアンよりタチ悪いわ自分！」

「だから黙れええー！」

次は左腕。もはや人生終了。両腕落とされて生きてるなんて、フィクションの世界。俺は現実を生きるただの高校生。こんな事されたら…死ぬ。せめて最後の足掻き。

「自分の価値観…うまく言えんと…現実を生きてるお前なんか…

死んでまえー！」

俺は叫ぶと、愛美に向かって全力疾走した。自分でも意味不明。愛

美も俺に留めを刺すつもりなのか俺に向かってくる。全力で走ると、誰かの血で滑り仰向けに転倒。

が、倒れると同時に宙に浮いた俺の足が愛美の顎に炸裂する。サマ―ソルトキック。凄い勢い。どれだけ凄かったかなんて実際解らなかったが、愛美はそれをモロに喰らい身体全体が宙に浮いていた。そして、彼女も凄い勢いで天井に突き刺さる。

まるで漫画のように。

天井に突き刺さった愛美は意識を失ったか、あるいは死んだかで身体がプラプラと揺れていた。手元から刀が落ち、俺の顔すれすれで床に刺さる。

「…なんやねんコレ。所詮…俺の生きた世界なんて…こんなもんか…もし…これで俺生きてたら…マジでフィクションやん…そうなたら…絶対自殺したる…か…ら……な……」

俺は永遠の眠りについた。

完。

あれ？

おかしい。何故まだ続いてる。おい待て待て待て。アレで終わりでいいだろ。やめろよ。愛美じゃないけど、コレは流石に俺も認められないぞ。

「博士、実験サンプルが目覚めました」

「おお、長年研究したかいがあった。あのバラバラ事件でモンスターを撃退したかいだけの事はある。ふむ、よくやった」

おいおい、こんなあからさまでありきたりな展開やめてくれ。

「おはよう。我が研究の産物よ。いや、ダークセイバー……」

[illegible]

「これから君は世界の崩壊を防ぐため、悪の組織『ノンリアルモンスターズ』を倒してもらおう！そのために、我々は君をサイボーグ化させたんだ！我々を、人類を……頼んだぞ！」

俺は：俺は：

「……？博士、**ダークセイバー**の様子が変です」

「む!? い、一体どうしたんだ?」

俺は、状況を理解し博士に向かって叫ぶ。

「死なせてくれえええ！」

（本当に完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1961/>

ノンフィクションモンスター

2010年10月21日22時55分発行